

「通いの場」におけるプログラム傾向

- JAGES参加8市町155箇所ボランティア代表調査 -

研究代表者 竹田 徳則（星城大学リハビリテーション学部 教授）

研究要旨

日本老年学的評価学研究（JAGES）プロジェクト参加全国8市町の通いの場155箇所におけるプログラム頻度の高い内容を調査票を用い把握した。その結果、頻度の高いプログラム順として、健康体操120箇所（77.4%）、お茶おしゃべり104箇所（67.1%）、室内ゲーム90箇所（58.1%）、健康講和と音楽活動が各40箇所（25.8%）、創作活動34箇所（21.9%）などであった。

また、プログラムの組み合わせによる分類では、多い順で示すと健康体操・お茶おしゃべり・室内ゲームが35箇所（22.6%）、健康体操・創作活動・お茶おしゃべり、健康体操・健康講和・お茶おしゃべり、健康体操・音楽活動・お茶おしゃべり、健康体操・音楽活動・室内ゲームが各7箇所（各4.5%）、健康体操・健康講和・室内ゲームが6箇所（3.9%）などで、健康体操とお茶おしゃべりの2つと他の1つの組み合わせが多い傾向だった。男性ボランティア割合の多寡による特徴として、男性が多い場合には創作活動とお茶おしゃべりが少なく、世代間交流と音楽活動が多い傾向であった。

A. 研究目的

長寿高齢社会の我が国では健康寿命の延伸と介護予防の推進が課題となっている。その取り組みの一つには通いの場（サロンなど）の活用が挙げられる。これまで通いの場を活用した介護予防効果に関する追跡調査は、憩いのサロン事業参加者に着目した報告^{1,2)}や参加者と非参加者とを比較した愛知県武豊町に関する報告に留まっている^{3,4)}。

ただし、通いの場に参加することそのものがよいのか、どのようなプログラムが効果を高める可能性が高いのかは明らかではない。厚生労働省が公開している全国市町村の平成27年度介護予防に資する住民運営の通いの場の概要⁵⁾によると、体操や会食と茶話会、認知症予防、趣味活動に関する実施箇所数についての記載はある。例えば、体操の実施箇所数は、7万134箇所のうち3万197箇所

(43.1%)と報告されている。しかし、前述以外の具体的なプログラム内容や組み合わせ内容の把握は行われていない。

また、これまで展開されてきている全国社会福祉協議会主管の「いきいき・ふれあいサロン」におけるプログラム内容に関する報告はある⁶⁾が、どのようなプログラム構成が多いのかは明らかでない。

そこで本研究では、通いの場で提供されているプログラム内容とその構成を把握することを目的とした。

B. 研究方法

日本老年学的評価研究（JAGES）プロジェクト2013年度調査参加31市町村の介護保険関連担当者に対して、平成27年11月に調査協力について事前依頼を行った。回答のあった17市町村（54.8%）のうち調査実施協力可が

8市町（回答市町村の47.1%）であった。そのうち各通いの場ボランティア代表を対象とした調査可の会場数は179箇所であった。自記式調査票を平成27年12月に前述担当者へ送付し、各担当者を通じてボランティア代表者へ配布と回収を依頼した。その後、平成28年2月中旬までに調査票を回収後に返送してもらった。

本研究での報告は、代表者の基本属性（性別、年齢）、各通いの場におけるプログラム内容、男性ボランティアの割合の違いによるプログラム特徴に関する内容である。各通いの場におけるプログラム内容については、「担当している通いの場のプログラムについて頻度の高い内容3つを選択してもらった。選択肢として、健康体操、創作活動（手工芸）、健康講和、世代間交流（保育園児や学生などとの交流）、音楽鑑賞、音楽活動（歌唱や楽器演奏）、演劇鑑賞、お茶とおしゃべり（茶話会）、文化活動（習字・俳句など）、脳トレーニング、室内ゲーム、その他を設定した。該当したプログラムの組み合わせを確認した。その際全対象の選択数がそれぞれ15以下を省き7つのプログラムを用いた。

男性ボランティアの割合については、各通いの場の総ボランティア数に占める50%以下と51%以上、該当者なしの3区分にて比較した。なお、今回選択数を頻度の高い3つと指定したが3つ未満や4つ以上の代表者回答が60箇所あった。このため分析ではすべての選択数を用いた。

分析は、IBM SPSS statistics 23にて記述統計とクロス集計を用いた。なお、本研究は星城大学研究倫理委員会の承認（2015C0013）後に実施した。

C. 研究結果

通いの場代表者155名の基本属性は、男性47名（30.3%）、女性102名（65.8%）、未回答4名（3.9%）、平均年齢は68.4±7.7歳（43歳～86歳）であった。

表1に示した通いの場155箇所における頻度の高いプログラムは多い順では、健康体操120箇所（77.4%）、お茶・おしゃべり104箇所（67.1%）、室内ゲーム90箇所（58.1%）、健康講和と音楽活動が各40箇所（25.8%）などであった。

選択プログラムの組み合わせによる分類では、多い順で示すと健康体操・お茶おしゃべり・室内ゲームが35箇所（22.6%）、健康体操・創作活動・お茶おしゃべり、健康体操・健康講和・お茶おしゃべり、健康体操・音楽活動・お茶おしゃべり、健康体操・音楽活動・室内ゲームが各7箇所（4.5%）、健康体操・健康講和・室内ゲームが6箇所（3.9%）などであった。健康体操とお茶おしゃべりの2つと他の1つの組み合わせが多い傾向であった。

次に、表2に示した男性ボランティアの占める割合の違いによるプログラムの特徴では、男性が多い場合には世代間交流と音楽活動が多い傾向を示した一方で、女性が多いと創作活動とお茶おしゃべりや室内ゲームが多い傾向であった。

D. 考察

今回の調査結果では、個別プログラムでは、健康体操やお茶おしゃべり、室内ゲームの頻度が6割以上であった。平成27年度介護予防に資する通いの場報告⁵⁾における主なプログラム分類では、体操が4割、茶話会3割程度、趣味活動2割であった。この違いは、後者は主たる活動について単一回答であることが影響している。ただし、いずれの結果においても体操が上位であることや体操とお茶おしゃ

べりに他のプログラムを組み合わせで実施している通いの場が多いことが特徴であった。

一方、男性ボランティアの多寡によるプログラムの違いでは、男性が多いと創作活動やお茶おしゃべりが少ない反面、世代間交流や音楽活動が多いという特徴があった。

今回報告のプログラム内容やその組み合わせの違いが長期的視点において介護予防効果の違いにも影響するのか否かを検討することが課題と言える。

E. 結論

JAGES プロジェクト参加 8 市町の通いの場 155 箇所におけるプログラムでは、健康体操やお茶おしゃべり、室内ゲームの頻度が 6 割以上であった。また、健康体操とお茶おしゃべりの 2 つと他の 1 つの組み合わせが多い傾向だった。男性ボランティアが多い場合には、創作活動とお茶おしゃべりが少なかった。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

参考文献

1) 竹田徳則：地域介入研究による介護予防効

果検証：武豊プロジェクト．総合リハビリテーション42：623-629，2014．

2)大浦智子，竹田徳則，近藤克則，他：「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？．保健師ジャーナル 69：712 - 719，2013．

3)Hiroyuki Hikichi, Naoki Kondo, Katsunori Kondo, Jun Aida, Tokunori Takeda, et al: Effect of community intervention program promoting social interactions on functional disability prevention for older adults: propensity score matching and instrumental variable analyses, JAGES Taketoyo study. Journal of Epidemiology & Community Health69: 905-910, 2015 .

4)Hiroyuki Hikichi ,Katsunori Kondo,Tokunori Takeda,ea al:Social interaction and cognitive decline: Results of a 7-year community Dementia intervention.Alzheimer's &Translational Research & Clinical Interventions Available online 21 December 2016 .
<http://dx.doi.org/10.1016/j.trci.2016.11.003>

5)厚生労働省老健局老人保健課：平成 27 年度介護予防事業及び介護予防・日常生活支援総合事業（地域支援事業）の実施状況に関する調査結果（概要）。
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/27chousakekagaiyou.pdf>

6)全国社会福祉協議会地域福祉推進委員会（編）：ふれあい・いきいきサロンのてびき．全国社会福祉協議会，東京，2008．

表1 頻度の多い上位3つのプログラム分類(回答 155 箇所)

頻度	健康体操	創作活動	健康講話	音楽活動	お茶・おしゃべり	脳トレ	室内ゲーム
35							
8							
7							
7							
7							
7							
6							
4							
4							
4							
4							
4							
3							
3							
3							
3							
3							
3							
3							
2							
2							
2							
2							
2							
1							
1							
1							
1							
1							
1							
1							
1							
1							
1							

表2 ボランティア男性割合別プログラム分類

	ボランティア男性割合			合計	
	男性 0	男性 50%以下	男性 51%以上		
	箇所数	52	84	17	153
健康体操	該当数	42	64	14	120
	%	80.8	76.2	82.4	78.4
創作活動	該当数	20	14	0	34
	%	38.5	16.7	0.0	22.2
健康講話	該当数	15	20	5	40
	%	28.8	23.8	29.4	26.1
世代間交流	該当数	2	9	2	13
	%	3.8	10.7	11.8	8.5
音楽鑑賞	該当数	2	6	2	10
	%	3.8	7.1	11.8	6.5
音楽活動	該当数	13	21	6	40
	%	25.0	25.0	35.3	26.1
演劇鑑賞	該当数	0	0	1	1
	%	0.0	0.0	5.9	0.7
お茶おしゃべり	該当数	35	60	9	104
	%	67.3	71.4	52.9	68.0
文化活動	該当数	2	1	0	3
	%	3.8	1.2	0.0	2.0
脳トレ	該当数	9	17	1	27
	%	17.3	20.2	5.9	17.6
室内ゲーム	該当数	30	53	7	90
	%	57.7	63.1	41.2	58.8
その他	該当数	2	3	3	8
	%	3.8	3.6	17.6	5.2